20210129

えんちょうだより

赤城育心こども園
園長　深町　穣

新しい年になって、最初の園長だよりです。皆さん、今年もよろしくお願いします。

今回も、コロナについて少し書きます。新型コロナウイルス感染症の感染拡大で、行動の自粛など、私たちの不安定な生活が続いています。園にも、保護者の皆さんから、職場などで濃厚接触者になった人がいるといった情報が少し寄せられるようになってきました。このお便りを発行する時点では、まだ、赤城育心こども園に関係する人の中で、感染者は出ていません。このまま、社会が落ち着き、安心できる日が来ることを願っています。一方で、そう言っているだけはいけないということも私は感じています。園としても、感染した方や濃厚接触者とされた方が出た場合を想定して、話し合いを進めています。

私のお便りでは、読み飽きたことかもしれませんが、今日も書きます。私たちが闘うのは、新型コロナウイルスです。どんな事情であっても、それに感染した人、或いは、濃厚接触者となった人を差別したり、傷つけたりするようなことがあってはいけません。もし、感染してしまったり、濃厚接触者となってしまったりした人がいても、差別や誹謗中傷を心配することなく、その事実を口にすることができ、みんなが、その人を支えるための行動をとれるように、日頃から、心の備えをしておきましょう。

ところで、先日、ある研修会で助産師さんのお話を聞く機会がありました。妊娠から出産という経験は、男性にはできないものですが、出産は大変なことで、その過程で女性がストレスを抱え、精神的に不安定になったり、孤独を感じたりするというお話でした。昔は、助産師さんが、出産時に関わるだけでなく、その前後も女性を支え相談相手になり、アドバイスをするというスタイルが主流だったようですが、戦後に、西洋のスタイルが入り込み、病院での出産が次第に増えてきたということです。その中には、よいこともあったのだと思いますが、子どもを産もうとする女性を身近なところで支えるという日本の昔からのスタイルが少なくなりつつあるということでした。さらに、核家族化が進み、周囲に頼れる人が容易に見つからない現在、ママたちは、ますます厳しい環境で子どもを産むことになっているのです。もしかすると、私を含むパパたち男性には、出産にからむこの女性の大変さは理解できないのかもしれません。私自身、自分の子どもが生まれたとき、そして、その後もどのように妻や乳児に関わったらいいか、ドギマギしていたような記憶があります。

その研修会の中で、助産師さんの次のようなことを言いました。

「出産は、女性にしかできないことであるし、直接おっぱいをあげるのも女性にしかできないことです。そういう意味で、直接、子育てをするということについては、女性にも覚悟をもってほしいと思っています。一方で、男性が、出産や育児に関わることも非常に大切なことです。ただし、女性と全く同じことをしようとしてもそれは無理です。考えすぎて、うつになる男性もいます。では、何ができるかというと、女性が安心して子どもに関われるような“環境を整える”ことです。」

これは、私には、非常に印象的な言葉でした。多分、私は、何かしなくてはいけないと考えていただけで、妻にしてみれば、何もしていなかったのではないかと思います。“環境を整える”ということは、例えば、出産後に女性がゆっくり体を休ませられるように配慮したり、炊事や家事を積極的にしたり、時には、ゆっくり話に耳を傾けてあげるといったようなことだと思います。かっこよく大それたことをしなくては…と思っているだけで、何もできなかった私は何だったのでしょうか。そういうわけで、パパたち、しっかり“環境を整える”ことから始めて、楽しく子育てに関わっていきましょう。